

書換えられた魏志倭人伝

魏志倭人伝と後漢書東夷伝の成立

蔡倫により簡便に紙の製造が成り、書の普及が始まった。それ以前はパピルス紙、羊の皮、木竹簡などがあったが、厚く運搬困難で役所・寺院のみの保存で一般人には無縁の存在であった。紙が発売され製本として発刊されていったが、印刷技術が伴わず写し書きによる普及が始まった。人気書が出版されると写し書きする者が増え、紙価が高騰するという“洛陽の紙価を高める”という成語もできた。

写本は写本する人の能力により正確な本とそうでない本に分かれるが、次から次へと写本されてゆくの、どれが正確か否かは検討つかなくなる。写本では誤字・脱字は日常茶飯事で大した問題ではないが、自分の主観が入り改変されてゆくと内容も変わってくる。いま、魏志倭人伝と後漢書東夷伝を比較すると、主観的な書換え箇所が見られ、内容の異なりを示している箇所が見られ、書換え文が正史とみなされ、現代まで尾を引いているようである。

古代中国史の最古の歴史書は魏国の魚拳による「魏略」であるが一冊として現存せず、断片的に残っているのみで、現存する最古歴史書は陳寿の「三国志」である。陳寿は233～297年の時代の人で、魚拳とは年齢が十歳ほど違ふとされ、書の中に魏略によればという引用されているので原本は魏略といえる。魏略に次いで三国志が出版されたが、その成立は280から290年頃と推察される。

三国志の主人公は魏の曹操、呉の孫権、蜀の劉備と魅力的な人物と、スケールの大きい戦争場面があり、大人気を博し現在まで人気は続いている。「魏史」の中で、特別に倭国(日本)の特集編があり、「魏志倭人伝」と呼んでいる。全体は2016漢字から成るもので7ページにも亘る随一の資料である。当書は倭国から女王の使いとして使節団が奴隸のお土産を付けて訪問し、それに対して詔書と金印、銅鏡などを付けて倭国に返礼使節団を派遣したことになり、全三回の使節団派遣と三回の返礼使節団を送ったことの内容である。

そして、三国志の人気にあやかって、漢についての歴史書が、南朝宋の范曄(はんよう)と司馬彪(しばひょう)によって「後漢書」が発刊された。内容は後漢のことであり、魏志倭人伝同様に「後漢書東夷伝」が含まれている。范曄は398～445年の世代であるが、その間に書は成らず晋の司馬彪(しばひょう)に引き継がれ四三二年(元嘉九)に成立した。魏志倭人伝後150年後のことである。問題は魏志倭人伝が古い成立であるが、内容は後漢書より新しい事項であることを明記しておかねばならない。

魏志倭人伝の漢書東夷伝での書き換え

魏志倭人伝は後漢が滅びた後の魏呉蜀の歴史の中で、卑弥呼の命による使節団の経緯を著したものの特集物とみなせる。一方、後漢書東夷伝は三国時代前の後漢の時代の倭人の朝貢を著したもので、奴国王と帥升(すいしょう)王の二者の使節団訪問が該当する。魏志倭人伝は後漢書東夷伝より約150年古いのである。よって後漢書は倭人に関しては魏志倭人伝をほぼ丸写しの写本しているのであるが、誤字脱字の写し間違いを越えて、主観的観点で東夷伝が成っているところが散見される。

この書き換えに対し、日本の読者は後漢書の方が古いので、古い原本が正しいと思いつき込んだり、内容がほぼ同一故に両者の区別がなくごちゃまぜになっていて、この誤解の上に倭人伝を語っている人もいるので、ここに後漢書東夷伝の主要なる書換えを箇所を挙げて注意を促したい。

書換えその1 女王連合国の使節団の訪問時期の書換え

魏志倭人伝での魏国への初回使節団は、景初2年(西暦239年)となっている。一方、後漢書東夷伝では、建武中元二年(西暦57年)奴国の朝貢、永初元年(西暦107)年倭国王帥升(すいしょう)の朝貢があり、と年代付きで客観的記述をしている。

問題は女王卑弥呼の使節団の書き出しである。

「倭、韓の東南大海中に山島のためおおよそ百余国ある。武帝死後朝鮮の使訳を通して約三十国、皆歴代の王と称しているが、その大倭王の居る邪馬臺国、楽浪郡から行くこと一万二千里」とある。

更に東夷伝中ごろに「倭国大乱更に相攻伐暦年主無く一女子有り名を卑弥呼と呼ぶ年長不嫁・・・」とあり、卑弥呼を女王扱いしていない。文中に魏志への卑弥呼使節団の年代は記さず、後漢の時代に來たように見せかけている原本無視の主観的書換えがある。

書換えその2 邪馬台国への書換え

魏志倭人伝では女王直属の国を「邪馬壹国(やまいこく)」となっている。壹は壺であり一である。ところが後漢書では「邪馬臺国(やまたいこく)」となっている。さすがにこの書換えには理由が附してある。「案で今の名は邪馬惟音の訛ったものである」と故意に漢字を変えたとある。壹(一)を壹(台)に変えたのであるが、両者はほとんどに通った漢字であるが、意味は全く別であるが日本人なら気づかない。

魏志倭人伝では「邪馬壹国」になっている。邪馬は「よくない馬」という意味で夷国用の

軽蔑語である。当時日本には文字がないので、日本人が発した語を発音の似た漢字を当てたといわれるが、軽蔑語も尽きて同じ軽蔑漢字が多い傾向がある。魏は北京語系であるので「邪馬」を「ヤマ」とは読まない。「シャマ」と読む。「壺」は一である。

書換え その3 狗邪韓国(くやかんこく)の方向変化

魏志倭人伝では「郡(漢時代は楽浪郡、魏時代は帯方郡)から倭に至るには海岸を水行し、韓国を南に、そして東に行くと、その北岸の狗邪韓国に着く」とある。

これが、100年後に出来た後漢書東倭伝では「楽浪郡から遠方で一万二千里に在り、その西北界が拘邪韓国で七千余里」と有る。魏志倭人伝では倭国は南にあって、その最北端が狗邪韓国、とあるのに、漢書が西北と改変されている。

魏志倭人伝では南に、南行する、とかで南方向が基本となっている。つまり女王連合国はさつまいもみたいに南北に長い楕円状で、その先端は韓国の北端となる。しかし、後漢書ではさつまいもを横に倒した楕円形となり、その先端部は韓国の西北端となる。

4 女王国隣国の敵対狗奴国の移動

魏志倭人伝では女王国三十カ国全てを列記してあるが、「次に奴国有り。此こが女王の境界の所である。その南に狗奴国の男子王のところである」となっているが、後漢書東夷伝では「女王国より東に海を渡る千余里至る拘奴国、皆倭種と雖も女王には属さず」と大きく変えている。魏志倭人伝の終わりの部分では男子王国との戦争が記載され魏国に詔(みことり)と黄巾(魏の軍旗)を持って来るように依頼し、魏は軍事顧問の張政等を派遣して届いたときは卑弥呼は死去していたようである。ここまで詳しく隣の男子王の拘奴国と戦いが記してあるのに、全く無視して拘奴国を東の島に改変している。女王国が南にあるのは都合悪いため改変と推測できる。

5 書換えと非書換えの矛盾

一方、書換えをせず、書換えにより生じた矛盾箇所がある。魏志倭人伝には、倭人に顔や背中に入れ墨をしている、「夏后小康の子、会稽に封ぜられるや断髪文身して以て蛟龍の害を避く」の風潮を重んじている、ということ箇所がある。ここは書換えなく女王国南部では会稽(杭州の近く)と交流があり、倭に風習が残っていることを特記してある。日本から来る使節団は詣でするごとに小康の子孫と言っている、とかいてあり、過去二回の使節団もそう言っていたようで夏王朝(紀元前2070～1600頃)のことを倭人はよく知っていたようであ

る。

これが後漢書東夷伝では「拘邪韓国より七千余里その地は大体会稽の東冶（後漢では会稽を指す）の東に位置する」と改変なく更に具体的にかいてある。東夷伝の中頃に西暦57年の奴国の朝貢に対して「朝賀使人が大夫（大臣）と自称す。倭国の極南界也」とある。極南であるので、九州南端を意味していて投馬国までは女王連合国としていないが、九州南部に邪馬壹（やまい）国があったことはうかがえる。

考察

後漢書東夷での大きな主観的書換えの意図は、卑弥呼連合国は九州北部から南部に伸びる細長い連合国で、女王国の邪馬壹（やまい）国は連合三十ヵ国の南にあることが記載されてはいるが、台頭してきた近畿の新勢力により、昔から近畿に在ったことに辻褃合わせをやったといえよう。そのために邪馬壹国（やまいこく）を邪馬臺国（やまたいこく）に変え、ヤマトと読ませるように仕向け、古来から奈良盆地周辺を邪馬臺（やまたい）とし歴史を作り、そして、大和という軽蔑語でない漢字に変えていったと推測するものである。

魏志倭人伝の後漢書東夷伝の書換えは、神武天皇が奈良一帯を統一し、次第に強大化し、天皇国家を作り上げ、韓国と中国との貿易を拡大するために国家を挙げての事業で北九州の豪族制圧に卑弥呼伝説を利用したのであろう。